

探求・川にちなんだ万葉集の歌

第49回

万葉の川心

横浜市立羽沢小学校教諭 澤井 園子

辛荷の島を過ぎし時に、山部宿禰赤人の作れる歌(反歌)

(巻第二 九四五番歌)

風吹けば波か立たむと伺候に

都太の細江に浦隠り居り

すべての命に力がわき上がる春。四月は「始まり」。別れと出会いが交差する。新天地への旅立ち、そして、「慕情」の季節となる。

雑踏の中、一人反対の方向へ歩いているような孤独を感じてふり返る。なぜここにいるのだろうか。愛する人と離れて、何の意味があるのだろうか。それでも与えられた運命の力に押されて、前へと進んでいく。新しいこの地で自分の居場所が見つけれられるだろうか。不安を抱えたままでビルの谷間に隠れていく。

山部赤人は、宮廷歌人である。天皇のお供をして、そこで土地をほめたたえる歌をうたうのだが、彼はとりわけ「自然」に対してとても情熱を感じていたと言われる。「愛する妻と住まいを後にして、船でお供の旅路に出た。淡路島を越え、行き隠れゆく島の岬ごとに一つひとつ慕情を深めて進む。島を廻る鵜に思う。もし私がおまえならばこんな家に思わないのに。恋しい大和へ上る船とすれ違えば、羨ましさでじっと見送る。」広大な海、岬を過ぎるたびに離れていく故郷、舞い飛ぶ海鵜、行き交う船。長歌の後に三首の



短歌をおいて一つの世界が完成し、洋上の景色に感じる熱い思いを表現する。そして、最後のこの歌で、「吹く風に波が高かろうと様子をうかがい、都太の細江に浦隠れしていることだ。」と少しの間、身の安らぐ場所静かに呼吸を整えて結んでいる。「隠れる」という言葉に、君から見えないけれど、確かにいるんだというメッセージが聞こえる。見えるもの触れるものがすべてではない。ふるさとも妻も見えないけれど、あの島に隠れているだけだ。心はいつもそばにいる。信じることで少し、前に進める気がしてくる。写真の碑は、姫路市飾磨区を流れる船場川に架かる思案橋のきわにある。この地の今在家が津田村と称され、「都太の細江」はこの付近にあった細江と言われている。菅公左遷の折りの上陸休憩地としての座像と梅とこの碑が、静かに川を見つめていた。

時は五月。やる気満々もいいが、たまにふり返り、立ち止まり、浦隠れるときがあってもいい。慕情があふれたら、心のままに、そのままに。

